

次世代出版システム

●出版というシステム

出版はひとつのシステムである。本が企画され、編集され、印刷製本され、書店に並ぶという一連のしくみである。このシステムはどのようにして生まれ、今どう変わろうとしているのだろうか。

現在の出版システムが確立したのは戦後のことである。さまざまあった出版取次が日本出版配給（現在の日販やトーハンの前身会社）に統合されてからのことである。

出版システムの根幹はこの出版取次にあると言える。

本とはなにかと言えば、日本においては実際に書店で売られている（入手できる）ことを意味するが、書店で売られるためには原則として取次を介する必要がある。昨今の出版不況で目に付くのは書店の閉店だが、実際には全国の津々浦々に本を流通させる力がなくなっていることの結果として起きていることである。

もともと書店は本を置いておく場所貸しのような業態であったが、出版が近代的なビジネスになり、より利益や効率を求められるようになると、いわゆる街の本屋さんのようなものは存在が難しくなっていく。より洗練されたビジネスモデルを持った大手グループに駆逐されたり取り込まれていく運命を避けられない。かつての漫画に描かれていたような牧歌的な書店というのは今ほとんど存在しない。

本の出版サイクルが年々速くなっている。欲しいと思った本をそのときに購入しないと、次に行ったときにはもう見つからないという経験はないだろうか？今の出版システムは多くの方が想像する以上に効率化、スピード化されており、時流に合わせて次々と売り場や商品構成を組み替えている。話題の変化に追いつこうとしている面もあるが、かつての「置いておく」ビジネスから「本を回転させていく」ビジネスへの転換という出版システム独自の要因もある。

書店は当然本を売らなければ成り立たない。場所を借り人も雇っている以上、つねに本を売っていかなければ成り立たない。取次も本を書店に送り続け、それが計画通りに売れていかないと成り立たない。もちろん出版社も本を作り続け、それが計画通りに売れていかないと立ちゆかなくなるのである。この連鎖が極地にたどり着いたのが現在の出版システムと言える。

●現在の出版システムは誰かが望んでこうなったのか

ここで視点を変える。本は読者があっての本である。読者はこのような状態を求めているだろうか？現実としては街から書店が消え、品揃えも売上重視のものになり、欲しいと思った本が次に行ったときには見つからないというせわしない状況は、どこかおかしくないだろうか。

とはいえ出版システムを回す側の理屈で言えば、本は作り続けなければならない、本は送り続けなければならない、次々生まれる本はあっという間に淘汰されていくのである。もちろんネット社会

となり情報スピードが上がったのが要因のひとつではある。ただ、繰り返しになるが、出版システムそのものに起因する要因も大きいのである。

●本とはなにか、書店とはなにか

そもそも本とはなにか、書店とはなにか、を考えてみよう。本とはある人が読者にどうしても伝えたい情報を、本という自分の分身の形にまとめたものである。書店とはそうして形作られた本と読者との出会いを促進する場である。

もし本が「読者にどうしても伝えたい情報」でなくなったり、書店が本と読者の出会いを演出する気力を失ってしまったらどうだろうか。出版システムの問題を効率化やスピード化だけで解決しようとした場合、この危惧が当たってしまうように思う。

●本や書店が消えていったとき、生活の中で知性を持ちうるか

そもそも現代資本主義は効率化やスピード化が行き着くところまで行き着くようにできている。その結果いつかそのシステムは破綻し、また次のシステムが再構築されるということを繰り返している。出版システムはこの危機を乗り越えることができるだろうか。それとも別のシステムに再構築されるのであろうか。

これからの未来を考えたとき、本は必要だろうか、書店は必要だろうか。スマホがあれば情報は手に入る。本もアマゾンで出版し入手できると考えれば、それでもいいのかもしれない。実際そういう未来もあり得る。

しかしインターネットのしくみはほかにはないくらいに現代資本主義的である。世界的な規模で見た場合、日本の市場は取るに足らないものと見なされる可能性がある（今後ますますそうなるだろう）。そのとき私たちはどこで情報を発信し、どこで広め、どこでその情報を受け取ったらいいのだろうか。

私たちが必要な情報が本という形で生まれ、全国どこでも手に入るというのは、当たり前のようではある。なくなったときに本当に私たちは生活の中に知性を持つことができるだろうか。

●知性と民主主義-おかしいものに抗う力

知性というのは得るのも伝えるのも難しい性質のものである。なにもしなければいつの間にか失われていくものである。人工知能に知性を依存してみようとしたところで、知性というのは個人や社会の成長の結果として徐々に形作られてくるものである。人工知能にそれを期待できるだろうか。

もし可能だとして、人工知能を動かし続ける膨大なエネルギーはどのように作ったらいいのだろうか。人工知能を動かすために労働し、そこから得られた知を享受して生きる人生は極めて合理的かもしれないが、それを人生と言えるだろうか。

●民主主義と資本主義

私たちが生きている社会は民主主義社会である。民主主義の原点は自律した個にある。であるならば、社会の目的は人間が成長して個となり、ほかの個と社会的な交流をして社会の価値を高めていくことになる。その役割を放棄するとしたら、現代社会の大原則を捨ててしまうことになる。人工知能で「最適化」された人同士が社会的に意味ある交流をできるとはとても思えないのである。

現代資本主義的なシステムの上で生きる限りは最適化、そしてその先にある過剰適応、システムの破綻から逃れることはできない。人工知能は今のところは善の表面を見せているが、いつかその裏面を表してくる。人工知能が絶対的な最適解を提示してきたときに、そしてそれが本能的におかしな解だったとき、私たちは抗うすべを持っているだろうか。

●次世代社会システムのデザイン

人が個として生きていく上で一番大事なのは本能的に受け入れられないものに抗うすべを持っているかどうかである。本能的におかしいと思っても、人類は幾多の争いを繰り返し、過剰な競争を繰り広げている。

当座生きていくための方便として現代資本主義を一定程度受け入れるとしても、それに過剰適応してしまったとき、自律的な個は失われている。私たちは当面の間は不完全なシステムとして現代資本主義を利用しながらも、次世代の社会システムをデザインしていかなければならないのである。

●次世代出版システムのイメージ

本稿のテーマは本、そしてそれを支える出版システムである。次世代の出版システムはどのような形があり得、そして望ましいだろうか。

本の一番の特性は、生まれた瞬間に一つの個性を体得し、時代や距離を超えて伝わっていくことにある。現代の出版システムにおける消費される商品としてのものとは違ったところにある。

一つの個性を体得する、ということは、ほとんど人が成長して大人になることと同じである。本も企画から生まれ、編集過程で成長し、最後大人になって世に出て行くのである。その過程を新しい形で再現するのが次世代出版システムのテーマである。本は生命的、人間的でなければならない。それを支えるための、持続的なしくみを作りだすのがこれからの出版人の役割である。

●魅力的な本づくりとは

ひとつの個として首尾一貫性がある、意味をなしている、意志を持っている
人間の幸福に寄与する
成長していく
オープンになっている、次につながる、深掘りできる
→知的に面白い
※AIに意志はない

●そのための編集とは

情報を紡ぎながら、首尾一貫性を作り上げ、総体としての意味、意志を持たせること
人間の幸福に寄与する形に導く
その過程で著者と共に読者と共に成長する
オープンで、次につながる、深掘りできる形にする
→知的な生命的個を生み出す作業

・第一要件 読める

最低限の要件

例：作文

・第二要件 間違いがない・問題（リスク）がない、傷つけない

正しさ、適切さ、他者尊重

例：レポート

・第三要件 意味が通る

インテグリティ

例：自費出版

・第四要件 読む気になる

おもてなし・顧客視点

例：商業出版

・第五要件 面白い、役に立つ、受ける、刺さる、エモい

魅力・共感・モチベーション・実用性

例：話題書

・第六要件 意味がある、ためになる、感動する
人生観、姿勢、社会的意義、社会的インパクト、本質性
例：ベストセラー

・第七要件 残る、語り継がれる
再構成・再解釈・発展可能性
例：名著

●そのために必要なインフラ

つくる：共同編集システム
世に出す：出版システム
広げ、相互作用を生み出す：知の交換システム

●新しい民主主義へ

出版の民主化、誰もが知的な生命的個を生み出す社会
自由で知的な言論、知の交換、創造社会

時期	社会発展段階	基本原理	力の源泉	社会の状態	価値基準	社会状態	根底技術	コミュニケーション	限界	知の蓄積
	部族社会	血族	暴力	自然状態	生死	原始的な力による弱肉強食社会	狩猟・採取		自然に対する脆弱性	伝達
	王政社会	正統性	権力	秩序の形成	権威	制度化された弱肉強食社会	農業	一方向	社会停滞	知の独占
	国民国家社会	大義（国民国家という共	理想	秩序の再形成	最大化、集約化	最大化された弱肉強食社会	工業	一方向	戦争、搾取、周辺の消滅	知の独占

		同幻想)								
	世界経済社会	成長 (成長＝幸福)	成長	統合	効率化	経済化された民主的社会	国際経済	双方向	環境問題、貧困、差別、格差	知の集積と独占
	ネットワーク社会	つながり、集合知 (つながれば幸せになる)	協調	統合の複合化	ネットワーク化、名誉	社会化された民主的社会	インターネット	共感	コロナ、人としての尊厳	知のネットワーク化
	価値・共感・協創社会	全体善、倫理	成熟	獨創性、個性、創発	真善美	洗練された民主的・多様化社会	AI	創造	人間性が問われる	知の民主化

●新しい個

上記の社会に耐えうる個の必要性

●社会の発展のために

社会と個は相互発展する関係、それぞれがそれぞれを映し出す鏡